学校を創る

「生徒が主役の学校」を目指して ～「今、何ができるか」を問い続ける～

船橋市立宮本中学校校長　日根野（ひねの）　達也（たつや）

1　はじめに

本校は、昭和22年に戦後の教育改革により新制中学校として開校した学校である。これまでの歴史を紐解くと数々の栄光の記録が残されており、卒業生や保護者、地域の皆様の強力な支えにより、学校が成り立っている。私にとっては、教頭として平成21、22年に勤務した思い出深い学校でもあり、PTAや地域の方々の学校愛を強く感じるものだった。13年ぶりに校長として着任した本校は大きく様変わりしていた。コロナ禍の影響もあり、地域との連携は途切れがちで、当時の様子を知る職員は皆無となっていた。一方、令和４年の着任とともに、船橋市で唯一のコミュニティスクールをスタートさせることとなった。

今般は、「生徒が主役の学校」を目指し、学校行事や地域との連携を活かして、「自己実現のできる生徒の育成」を図る取組について紹介する。

2　「生徒が主役の学校」を目指す

本校の学校教育目標は、「一人一人が生き生きと行動し、自己実現のできる生徒の育成」である。具体的には、「自ら考え、行動できる」「責任を持ち、自ら進んで活動できる」ようになってほしいと願っている。

私から、全校生徒に向けて「『今、何ができるか』を考え、行動に移せる人になってほしい。」と繰り返し伝え、教職員にも、学級や委員会、部活動など、生徒の実情に応じて、かみ砕いて説明してもらっている。

3　学校行事を通して

本校は全校生徒が900名を超える大規模校であり、運動会や合唱祭などの学校行事は全校で行うことができれば、ダイナミックで感動的なものになる。さらに、生徒が前面に出るよう、教職員は助言・サポートに徹することで、生徒に充実感と成功体験を積ませようと考えた。

⑴運動会での全校ダンス

三色対抗の運動会で、それぞれの色ごとに１年生から３年生まで全生徒によるダンスを行った。選曲・振り付け・フォーメーションなどすべて生徒に任せるという冒険である。３年生のダンスリーダーがすべての指示を出すのだが、もちろんすべてがスムーズには進まない。そのたびに生徒たちの、悩み、考え、議論する姿が見られた。そっと助言する教職員に励まされ、困難を乗り越え、当日は三色とも素晴らしい発表を披露した。満足気な生徒たちの表情が、その成長を表していた。

⑵閉会式でできた全校生徒の団結の輪

三色対抗で行った運動会だが、勝敗が決した後に、誰からの指示でもなく、自然と生徒たちの意思でグラウンドに全校生徒が肩を組み円陣を作り出した。お互いを尊重し、たた

えあう生徒たちを見て、涙する職員の姿を見ることができた。

⑶合唱祭での特別支援学級の発表

千人規模で使用できるホールを貸し切って行った合唱祭において、生徒の自発的な行動が見受けられた。特別支援学級の発表には、実行委員・有志生徒や箏曲部、教員も参加し、パフォーマンスが行われた。通常学級と特別支援学級との交流を深めたいとの思いから、勇気を出して行った箏演奏とソーラン節演舞であった。すると、会場から自然と「どっこいしょ」と大きな声援が響きだした。最後はホール全体に響き渡る大声援となり、一体感を感じることのできる心が温まる瞬間を経験できた。

運動会や合唱祭における感動場面は生徒の自己肯定感の醸成につながったと思っているが、そのために教職員が綿密な計画と粘り強いサポートをしていたことは想像に難くない。

4　地域との連携を通して

令和４年にスタートした学校運営協議会（コミュニティスクール）では、それまでの学校が地域に支援してもらうことから、地域と学校が協働し、互いを支えあうことが求められる。学校は地域の一員であることを、内外にアピールすることが大切だ。

コミュニティスクールのスタートにあたり、コロナ禍に途切れてしまった、それまでの強固な学校と地域との結びつきを回復することが大切と考えた。一方で、教職員の働き方改革、PTA活動も改革の時期であることなどを考慮すると、地域との連携を効果的かつ合理的に実行することが要となる。

宮本中学区はその中心にJR東船橋駅があり、「ひがふなフェスタ」という大きなイベントが行われている。これまで、本校PTAバザーは「地域交流会」という名で校内で実施していたが、本年度から学校から飛び出し、「ひがふなフェスタ」で地域の方々に知ってもらうべく、実施可能な範囲内で活動を行うこととした。

市長も参加する開会式の司会を生徒会本部役員生徒が務め、駅改札前に生徒会活動の紹介パネル展示、ユニセフ募金活動、管弦楽部や箏曲部の演奏、特別支援学級在籍生徒の作ったクッキーの販売、野球部員による清掃活動、そしてPTAによる出店等々、大きく本校をアピールするとともに、参加生徒や職員が地域に支えられていることを実感する瞬間でもあった。学校経営方針の一つである「家庭・地域に信頼される開かれた学校づくり」が一歩進んだことを実感した。

5　「生徒ファースト」のために

本校は大規模校で、教職員数も多い。「生徒ファースト」の考え方を全教職員が共有するためには、コミュニケーションが何よりも重要である。教職員が相互に考えを伝えあえる職場環境を構築することが何よりも重要と痛感している。働き方改革も意識し、全体打ち合わせは週一回に限定しているが、主任会や日頃の会話を大切にし、今以上に風通しの良い組織として機能させていきたい。

6　おわりに

正解のない変革の時代と言われている。学校教育にも正解はないのだと思う。学校規模も違えば、地域の実情も違う。抱えている課題も様々である。他の学校と同じことをしていれば、何とかなる時代ではない。子供たちが生きていく未来を考えた時、目の前の子供たちにとって何が必要なのか、何が大事なのか、教育の最前線で働く教職員一人ひとりが真剣に考え、自らの意志で行動していく時代ではないか。

学校を支える

みんなで支え合い、共に成長していける学校を目指して

いすみ市立国吉中学校教頭　米本（よねもと）　千穂（ちほ）

1　はじめに

本校のあるいすみ市は温和な気候で、そこに住む人々もとても温かい雰囲気を持っている。また、教育に対して関心を寄せており、保護者の学校行事への参加率は高く、PTA活動等に大変協力的である。そのような地域に見守られて育つ子供たちもとても素直で礼儀正しい。共感力があり、親和性が高く、和気あいあいと生活をしている。一方で、１小１中の小さな学区であり、変化に乏しく、新しいものに触れる機会が少ない。積極的に未知のものにチャレンジすることを苦手とする傾向もうかがえる。そこで、年度の初めに校長は子供たちに「国吉中学校＝K[4]、カッコよくキラキラ輝く国中生になろう」と語った。このキャッチフレーズのもと、職員も子供も一丸となり、たくさんのことに挑戦し、みんなで成長できる学校を目指している。

2　過去の学びから

私は平成29年度に長期研修生として教育臨床を学ぶ機会をいただいた。その中で特に心に残っているのは、「心を開く信頼関係づくり」である。素の自分を出し、素直な感情のふれあいができて初めて信頼関係を築くことができ、その信頼関係の中で人は成長する。そして信頼関係を作るのは簡単なようでいてとても難しいということも。今までのあわただしい教員生活の中で、子供たちとの関係づくりを雰囲気で乗り切ろうとし、うまくいかない時は個々の相性の問題だと考えてきた自分にとって大きな考え方の転換となった。

教頭として着任するにあたり、これから出会う人と感情のふれあいができる信頼関係をまず築きたいと思った。立場上、子供たちと授業や様々な活動で直接一緒に過ごすことは少なくなるが、職員室の先生方、保護者、学校にかかわる外部の方々との関係づくりを進め、明るく和やかな学校作りに寄与していきたいという気持ちで教頭としての学校生活をスタートさせた。

3　体験を重視した活動

前述のとおり、まじめで穏やかな半面、新しいことに挑戦することが苦手な子供たちのために、多くの人と触れ合い、体験することを重視した取組を行ってきた。行事は生徒指導の重要な場面となりうるが、計画的に配置していかないと他の教育活動にしわ寄せがいってしまう。そこで、体験的な取組を行事として職員に下ろす前に、外部の担当の方とのやり取りを丁寧に行い、学校の実態に即し、実施に無理がない計画となるように心がけた。以下に今年度の体験を重視した取組を紹介する。

⑴企業による出前授業

６月、「ちば学校・家庭・地域応援企業等登録制度」の登録企業における、教育CSRとして、株式会社パル・ミートの皆さんをお招きし、食育の出前授業を行った。スライドを見ながら食物自給率の問題やフードロスの問題を、グループごとのワークを通して学んだ。

⑵ウォパン中学校交流

30年の歴史を持つアメリカのウォパン中学校との交流は、コロナで途切れていたが、今年度４年ぶりに再開することができた。５月にはウォパン中の生徒を迎え、９月には本校の代表生徒８名がアメリカを訪問し、アメリカの学校や家庭生活を体験した。

⑶インドネシア学校交流

11月、インドネシアのアル・アザール36中学校の生徒27名が、国吉中学校を訪れた。体育館での歓迎式典後、１～３年生の数学・保健体育・音楽の授業に参加した。お互い母国語ではない英語を使ってのコミュニケーションのためか、はじめは緊張していたが、徐々に打ち解け合うことができ、交流を深めることができた。

⑷千葉工業大学出前授業

千葉工業大学の未来ロボット技術研究センター室長の先川原正浩先生による講演「未来に向けてのロボット教室」を行った。学生の自作ロボットの操作体験を含め、先端技術の素晴らしさに触れるよい機会となった。

⑸高齢者ふれあい学級

地域の老人クラブの方々をお招きし、１年生がグラウンドゴルフを体験した。90代の方もいらして、地域で生き生きと活動する高齢者を良き先輩として和気あいあいとコースを回った。

⑹夷隅特別支援学校交流

12月、１年生が夷隅特別支援学校を訪れ、一緒にボッチャに取り組み、交流した。ほとんどの生徒がボッチャは初めての体験で、市原ボッチャクラブの方々や支援学校の先生、生徒の皆さんに教えてもらいながら楽しくプレイした。

４　おわりに

着任する時は、校長を助け、職員を支えるのが教頭なのだと意気込んでいた。

しかし実際には、学校全体に目配りする校長と、気づいたらすぐに動く職員の熱意に、自分が支えられることの方が多かったように思う。その中で、自分一人が支えるのだと意気込むよりも、支えてもらったときに素直に感謝の気持ちを述べる方がよいと学んだ。

何か頼めば気持ちよく返事をし、喜んで行動してくれる若い職員には頭が下がる思いでいる。その明るいパワーに呼応するように成長する子供たちがいて、学校は本当に素晴らしいところだと思う。

もちろん、様々な問題も起こる。しかし、信頼関係に支えられた中で、やり取りを繰り返すことで問題は解決に向かうし、それを成長につなげることができる。

学校が、大人も子供も支え合って共に成長していける場所であってほしいと願っている。

学校を動かす

若年層教員への指導と チーム学校づくりに向かう主幹教諭の働き

船橋市立峰台小学校主幹教諭　芳賀（はが）　悦子（えつこ）

1　はじめに

「主幹教諭は、校長及び教頭を助け、命を受けて校務の一部を整理し、並びに児童の教育をつかさどる。」と学校教育法にある。私は、校長より若年層教諭の指導力向上と不登校児童への対応や個別最適な学びのための保護者や関係機関との関わり等について、教職員の中心となって校務を行うよう命じられた。主幹教諭について知っていただく一助になればと思い、私の取り組みを紹介することとする。

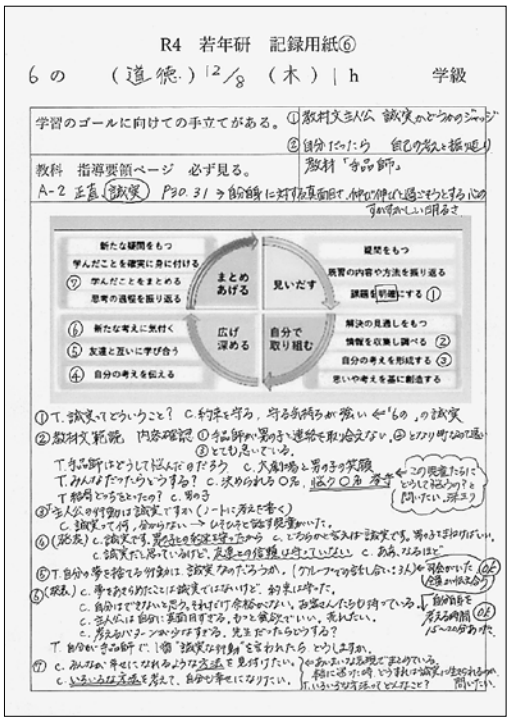
2　若年層教員の授業力向上への指導方法

⑴授業計画、個別授業参観、事後指導

１週間に１時間ずつ９名の若年層教員（５年目まで）の授業参観をし、その日のうちに振り返りをした。週案枠を作り、参観日時を決め、教科や学習のねらいを入力してもらい、全教科に取り組ませた。

毎時間視点を絞って参観することを心がけた。指導案は作成することへの負担を考え作成させていない。普段、担任は、頭の中に指導計画があり授業を進めている。その積み重ねの訓練も必要だと考えたからだ。だからこそ、実施している授業を参観している私が、記録用紙にその経緯を起こしていくことが、事後指導や授業者の振り返りに役立つと考えていた。授業中に記録していくので静々と手書きをした。記録用紙は、６種類となった。月によって視点を変化させていった。

児童の発達段階や研究授業等を考えながら、参観の視点が変化していった。最終的に、「『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」を活用した授業記録がとても有効だった（記録用紙⑥10月以降）。授業者も、授業を組み立てるときにこの表にのっとって考えていくとやりやすかったようだ。



この記録用紙を使って、事後指導を行った。各教科の学習内容の理解度確認や指導方法の話は当たり前だが、教室環境、言葉遣い、指示の仕方、授業以外の困りごとについても話し合うようにした。

⑵若年層研修会

１か月に１度、研修会を開き、全員共通に指導したいことや他の学級の様子を知らせた。また、実際に１年生で授業をして見せた。参観する視点が明確になるよう、授業展開が分かる資料を作った。９月以降、指導課要請訪

問や全員１授業研をし、その時間の運営や指導を続けた。県事務職員に協力してもらい、服務についても研修を行った。

指導を受けてきた教員は、授業作りの段階で、前回までに指導されたことを生かして、授業を組み立てたと答えている。また、生徒指導や教育相談についても、児童への声かけ、褒め方、指示の仕方、資料の提示方法等、教員としての技術を高められたと答えていた。

資料は、管理職に確認してもらい、次の指導への指針を提示していただいていた。ファイルを見ると、若年層教員の指導力の向上が分かり、お互いのモチベーションが高まる。この活動を続けていけば、学校の教育活動の質を向上させる取り組みになるだろう。

３　チーム学校をつくる

学校には、教員の授業力向上のほかにも、様々な課題がある。不登校児童への対応や個別最適な学びのための保護者や関係機関との関わりについて、主幹教諭の力が試される部分だ。令和４年12月、文部科学大臣より「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策「COCOLOプラン」の通達があった。「１. 学びたいと思ったときに学べる環境づくり　２. チーム学校で支援する　３. 学校を安心して学べる場所にする」必要があった。１人１台端末の利活用では、Google Meetを使って授業参観できるようにした。不登校児童の保護者には、主幹教諭が一緒に関わることを伝えている。直接面談をすること、電話での相談、家庭訪問と、担任と一緒に行動したり、分担したりしている。さらに、私たちには強力なスタッフ（市SC、県SC、SSW、学習ボランティア、学習サポーター）が付いている。特に、毎週関わっていただける市SC、SSWの２人には、教員の専門外の話題や福祉の話をしていただくことができる。不登校児童が一番苦しんでいるのは確かだが、保護者の負担も計り知れない。管理職を含め、この体制でチーム学校をつくり、活動を分担し、それぞれの役職の特長を生かしていく。

関係機関とは、船橋市の総合教育センター教育相談班・教育支援班、青少年センター、病院、フリースクール、市役所福祉課、家庭児童相談室、こども食堂等である。どこにつなげることがベストなのか、管理職の助言を受けながら、教育相談を進めていく。保護者や関係機関と関わるとき、闇雲に手立てを提案することは適切ではない。児童と保護者の意向を踏まえ、６年間で・この１年で・この半年でと、話し合いながら目標を決めることが大切だ。

日々問題を抱える児童に相対したとき、「今日は、これをやってみましょう。」「ここまでできれば、合格です。」と、提示してきた。今何をすればいいのか児童が分かると、短期目標が決まり、実践しやすそうだった。高学年児童には、自立を促すために、「どんな決定でも受け入れます。自分で決めましょう。」と話してきた。これを話すときには、保護者の理解が必要だ。児童に行動を選択させることを、理解していただかないと、逆に不信感につながる。船橋市が求めている自立できる人間を育てるために、ときにはその児童の決定に委ねる必要があると考えているからだ。

４　おわりに

以上、主幹教諭の立場で重点的に行ったことを論じてきたが、私一人で行っていることではない。所属職員がチームとなり校長の指導の下実践している。主幹教諭は、その全ての教育活動の要として、課題を見極めながらチーム学校を支えていかなければならない。

授業を創る

持続可能な社会の担い手を育む社会科学習を目指して

我孫子市立我孫子第一小学校教諭　神野（かみの）　智尚（ともひさ）

1　はじめに

現在、環境や食料などについての課題が山積しており、行政・企業などのSDGsに関する取組が話題となることが多くなった。そのような時代にあって、小学校社会科の産業学習では、児童がこれからの発展について自分の考えをまとめることが求められている。しかし、学習したことをもとにしていても、「発展」について自分事として考えることは難しい。そのため、児童が持続可能な社会の担い手として、多角的に自分の考えがまとめられるような学習を充実させる必要があると考えた。

本稿では、第５学年で実践した水産業単元について紹介していきたい。

2　教材開発の視点

過去の水産業単元の実践では、単元の「まとめあげる」場面で、従事者不足や漁獲量・消費量の減少などの課題を捉え、自分の考えをまとめさせていた。そのため、「どうしていけばよいのかはわからないけれど大変な状況だということがわかった」という児童が多くいた。そこで、課題を乗り越えていけると児童が実感できるような取組を扱った単元を構想すれば、これからの水産業に希望が持てたり、水産業をよりよくしていこうと考えられたりする児童を育めるのではないかと考えた。

そこで、教材を吟味する視点として、①実際に取り組む人の姿が提示できること②よりよい社会のイメージを具体的にもてること③自分たちの生活との関わりを見出せることとした。この視点から、水産業の課題を解決しようと取り組んでいる事例として閉鎖式循環型陸上養殖（以下、陸上養殖）を扱い、FRDジャパンの宮川氏を提示することにした。

写真１　閉鎖式循環型陸上養殖の様子

写真２　FRDジャパン宮川氏

もちろん、陸上養殖をしていればすべての課題が解決するわけではないが、陸上養殖は今までの養殖漁業の枠組みを変え、生産量減少などの課題を解決できる可能性のある漁業形態である。これからも魚を食べ続けていくための方法の一つとして教材化を試みた。

3　単元構成の工夫

水産業は我々国民の食料を確保する重要な産業の一つであり、これからの水産業の在り方を考えることは他人事ではない。本実践では、この点を十分捉えさせ、現状の取組につ

いて、これからも魚を食べ続けるための良さと課題を整理するとともに、自分ができることを考える場面を設定した。学習計画をもとに現状の取組を調べ、生産者の工夫や努力を踏まえた上で、その良さや課題を整理する。

単元全体の構成では、単元を貫く学習問題を設定し、これからの水産業の在り方を追究していけるよう工夫した。また、学習問題の中に持続可能性に関わるキーワード（「これからも」など）を取り入れることで、考える視点を明確にした。発展を考える上で視点となる効率性や有限性に関わるキーワード（「限られる」など）は板書に明記していくようにした。

4　指導の実際

１時間目に2048年に日本の漁業が成り立たなくなる可能性を示し、給食を例に魚介類（出汁含む）が食べられないことを想起させた。このことから、単元の学習問題が「これからも魚を食べ続けるためには、どのように取り組んでいけばよいだろうか。」となり、獲りすぎを防ぐ工夫、捨てられている魚の活用方法、魚を増やす取組について調べる計画を立てた。授業後、「魚が減っているのは少し知っていたけど、こんなに深刻で驚いた。」「今後も魚を食べたいから何かできることをしたい。」などの学習感想が挙がった。

２～５時間目には、漁業の工程や協力関係、技術の向上などに着目して、獲りすぎないためのルールや決まり（200海里、漁業法改正、海のエコラベルなど）を作り守ったり、未利用魚の活用や栽培漁業、養殖漁業、陸上養殖に取り組んだりしている人々の姿に迫った。特に、陸上養殖では、FRDジャパンの宮川氏へのインタビューを通して、自然環境に近い条件で効率良く生産できるよう努力したり輸送方法や販売方法を工夫したりしていることを理解することができた。

６・７時間目には、それぞれの取組の良さや課題を文や表にまとめる中で、生産者の立場から水産業に関わる人々の工夫や努力を整理した。さらに、消費者の立場から自分が関われることを考えた。この学習活動を通して、水産業が国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることを理解していった。学習感想には、「魚を食べ続けるために一人一人が協力していく必要がある」というものが多かった。

5　成果と課題

本実践を通して、児童が持続可能な社会の担い手としての立場に立ち、多角的に自分の考えがまとめられるような学習を充実させるために、①課題解決への切実感、②現状の理解、③解決を試みる人の営みへの共感的な理解、④実現性などの視点を取り入れた学習問題、⑤未来について考える場面の設定などが重要だということがわかってきた。

一方で、消費者としてできることは限られているため、本単元で選択・判断の場面は設定せず、水産業の発展について考える場面に留めておくべきだったと感じる。

6　おわりに

拙い実践を紹介させていただいたが、どんな学習も前提は学習指導要領で示されている目標を達成することである。まずは、教科書や資料集、副読本を分析することから教材研究をスタートしていきたい。そして、どのような手立てを講じたり、資料を提示したりすれば学習指導要領の目標を達成することができるかを考え続けていくことが重要である。

本稿が持続可能な社会を担っていく児童や社会科授業にともに励んでいる先生方の一助になれば幸いである。

授業を創る

専門性を生かした食育のコーディネート

柏市立柏の葉小学校栄養教諭　村中（むらなか）　恵（めぐみ）

1　はじめに

本校では学校食育の第一目標である「子供の望ましい食習慣の形成」を掲げ、年間計画のもと栄養教諭を中心に食育を進めている。栄養教諭は食育の実施主体として取り組むだけでなく、コーディネーターとしての役割も担っている。今回はその一部を紹介したい。

2　柏市歯科医師会と連携した食育

○道徳教育との関連を持たせた食育

２年生の道徳で節度・節制に目を向ける授業に関わることがきっかけで、３年前より柏市歯科医師会の方々と連携して食育を進めている。

本校での歯科指導と食育の状況について協議し、歯科医の方々よりアドバイスをいただきながら「かむかむメニュー」を考案し給食で提供している。

これらの活動は柏市歯科医師会のYouTubeにもアップし、地域や家庭に向けても発信している。

今年度は「よくかむとどんないいことがあるのかな」という学級活動の授業を歯科医と栄養教諭が一緒に授業を行った。栄養教諭は実際に「よく噛んでみる体験」を行い、だ液や口・歯の様子から、「よくかむこと」の大切さを伝えた。歯科医からは歯の大切さやかむことの必要性などについてお話をいただいた。

この授業は市内の学校でも実践され、広がりを見せている。

3　カリキュラムマネジメントと食育

○生きた教材の提案

食に関する指導の内容は、教科横断的な視点から教育課程を編成することが求められている。

各教科での食に関連した単元に関わる際には、栄養教諭は単元のねらいや評価について十分理解することが大切であり、学年や学級の実態を把握したうえで指導案の検討を行っている。

小学５年生家庭科「３つの食品のグループとそのはたらき」では、当日の給食で使われている食材を用意し３つの食品のグループに分け、食品のはたらきを理解したうえで、さらに自分なりに朝食メニューを考える授業を行った。

栄養教諭が関わる授業では、できる限り生の食材や動画をもとに体験を取り入れるよう提案している。また、他教科・領域、既習事項とのつながりや家庭生活がより豊かになることに重点をおいて指導案を検討している。

この授業の実施後には、自分の食生活を振り

返り、保護者や調理員に感謝の気持ちを持てたり、自分で朝食を作ったりする児童が増えた。

4　経験者研修等における栄養教諭の役割

経験の浅い教員が増えている中で、若手研修や経験者研修に向けた食育を進めている。今年度は教科における食育の検討や給食時間の指導など、連携を図りながら進めてきた。

学級の実態や、担任の目指す児童像から、指導事項や評価内容について十分に話し合い、計画を立てて進めた。さらに栄養教諭は調理員とも連携を図り、動画や具体物等指導資料の作成および指導を行った。

栄養教諭は専門的な知識のもと、担任が必要としている教材を作成して効果的な食育を進めることができた。その一例として、３年生のあるクラスで、給食の献立作成や調理の工夫点や給食残渣削減、配膳の仕方の見直しなどについて、朝学習の時間や給食時間の直前に食育の授業を毎週１回継続して行った。

その結果、食の大切さを知り感謝の念を持って、自らが給食の時間に目標を立てて取り組めたという実感につながり、「自己肯定感」の向上に繋がっている。

5　味わうことの大切さを学ばせる

子供の味覚が発達する成長期に、給食の様々な料理や食材を「味わわせること」も栄養教諭の大切な役割である。

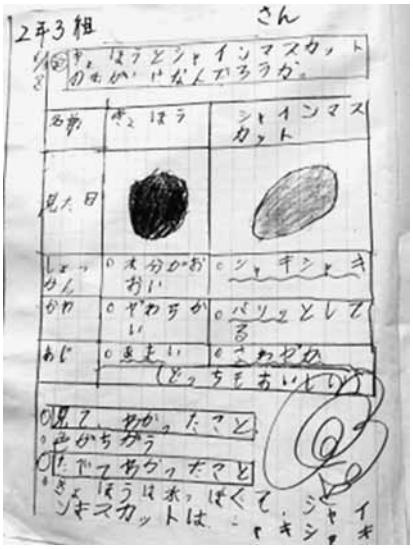
しかし、子供達に給食の感想を聞くと「○○がおいしかった」という声は聞かれても、どのように美味しかったのかという言葉は少ない。また給食の時間に教室を回っていても名前を知らない食材が多いことが気になる。

そこで、給食を味わって食べ、味わいを言葉にする味覚教育の取組を行った。

学級数が多いため、どの学年でも簡単にできるものとして、１回の給食で２種類のぶどうを出して、味わった感想をクラスごとにカードに記入することとした。

五感を生かし味わい「言葉に表現する」ことは、食べることと向き合い給食に関心を持つことにも繋がる。ぶどうが苦手でも味わいの比較をカードで伝えている児童もいた。また自主学習でぶどうの見た目や食感、味などの比較をまとめていた児童も見受けられた。

小学１年生の国語「ことばでつたえよう」では給食をテーマに文章を書く予定である。今回の取組で味わった感想を言葉にすることは語彙力や表現力を上げていくことに繋がるため、今後も継続して取り組んでいきたい。



6　終わりに

食育のコーディネートを進めるにあたり、先生方と「目指す児童像」を共有し、「子供の資質・能力の向上」を育むというカリキュラム　マネジメントの観点から、子供の実態に合わせた授業や指導方法を検討していくことが重要であるということを学んだ。

今後も栄養教諭は学校と地域・家庭がチームとして継続した食育に取り組めるよう、「チーム学校」の中核としてのコーディネートに努めていきたい。

学校で伸びる

３年目を迎えて

君津市立小櫃小学校養護教諭　神子（かみこ）　夏穂（なつほ）

養護教諭になり今年で３年目となる。私は子供の頃から健康であることが取り柄で、風邪をひくことも怪我をすることもほとんどなく、保健室とは無縁の学校生活であった。そのため、まさか自分が「保健室の先生」になるなんて思いもしていなかったが、今では養護教諭の仕事に魅力とやりがいを感じている。多様な健康課題を抱える子供たちと関わる中で、保健室はどのような場所であるべきか、日々模索している。学校の中ではあるが、教室とは違った空間であり、心身の不調を訴える場だが、病院とも違う場所である。ある時、低学年児童が指の痛みを訴えて来室をした。痛みのある部分を確認すると出血や腫れなどの外傷はなく、話を聞いたが怪我をした様子もなかった。手当ての必要はないと思ったが、児童が不安そうな表情をしていたため、話を聞きながら絆創膏を貼った。すると「保健室の先生ってすごい！痛くなくなった！」と一瞬で笑顔になり元気に教室に戻って行った。１枚の絆創膏と話を聞くことが、その児童にとっては必要な手当てであった。教室や病院とは役割の違った「保健室でしかできない手当て」があることを児童から教えてもらい、また養護教諭の魅力を実感した。養護教諭の職務は思っていた以上に多岐に渡り、悩むこともあるが、あらゆる経験を自分の成長の糧とし、日々成長していきたい。そして子供だけでなく教職員や保護者からも信頼される養護教諭を目指していきたい。

学校で伸びる

あの一言で……

市原市立八幡中学校教諭　市川（いちかわ）　梨恵香（りえか）

教員生活３年目、とある先輩のあの一言で私の教師としての考え方が変わる。

「さっきのあなたに教わった子供たちは、何かを得ることができたのかな……」その一言は私にとって大きな衝撃となった。この言葉の真の意図を考え、落ち込む日もあった。しかしある時、私は気づいた。その先輩の考えには常に「生徒」が主語となっており「生徒をどのように育てたいのか」という思いが根本にあったことを。先輩にご指導を受けてから、これまでの自分がいかに何も考えずに生徒と接していたか気づくことができたのだ。その日から私は教師としての立場や、子供を育てるために何をすべきか、それまでの何十倍も考えるようになった。そして私に明るい希望の光が見えた。

私たちの職場だけでなく、現代社会では〇〇ハラというパワーワードに敏感になりすぎて、自分にとって厳しく感じたり苦しく感じたりすることのすべてが、まるで「悪」のように取り扱われることがある。時に厳しく指導を受けることに批判的になる若手も少なからずいるのではないだろうか。

当時、私にとって、とてつもなく厳しく感じたあの一言のおかげで、教師として大きく前進することができた。今では先輩に大変感謝している。まだまだ未熟者ではあるが、私も先輩のように「自ら気づかせる一言」を自然に発することができる教師になりたいと心から思う。

幼児教育の今

『おたがいさま』のチームワーク

長柄町立ながらこども園園長　川嶋（かわしま）　静雄（しずお）

1　はじめに

本園は、平成22年４月１日、長柄・三島野保育所、水上幼稚園が統合し開園した。身近な子育てのパートナーとして、保護者の役に立ちたいという思いを大切にしながら、日々の教育・保育を実践している。

本園には、子育て支援センターが併設され、親子で安心して遊べる場、地域の人と出会える場、情報交換や相談の場を提供し、未就園児の様々な子育てニーズに応えている。

2　何をするにも『楽しく』

めざす園児の姿は、「元気な子、興味関心を持つ子、やさしい子」である。合言葉を「あいさつ　チャレンジ　えがお」とし、「元気いっぱい、やる気いっぱい、優しさいっぱい」の子どもになってほしいと願っている。

楽しいこども園となるために、四季折々の行事を計画・実施し、何をするにも『楽しく』を心がけ、子どもと保育者が一緒に楽しんでいる。また、ALTによる英語活動や外部講師によるボール遊び教室等も取り入れ、充実した園生活ができるよう、子どもたちが夢中になって遊ぶ環境作りを目指している。

3　『子どもファースト』の関わり

年度初めに職員としての心がけについて共通理解を図っている。①子どもファースト、②職員の和と協力関係、③笑顔とあいさつ、④言葉づかい、⑤動作・姿勢、⑥ホウレンソウとオアシスの態度・習慣、⑦保護者との連携の７つである。特に『子どもファースト』では、子どもの言動を先入観で決めつけないで、一人ひとりに応じた関わりを大切にしている。また、つくも幼児教室、こどものひなた、東上総教育事務所、長生特別支援学校、千葉聾学校等の関係機関と協力連携し、子どもの支援体制を整えるために、アドバイスを受けながら、教育・保育に生かしている。

4　『おたがいさま』のチームワーク

保育者一人が、安全に何人の子どもを同時に見られるだろうか。乳幼児の行動は予測がつかず、常に細心の注意を払い、一時も気の休まる時はない。

保育はチームプレイである。常に子どもたちの安全に気を配りながら、より良い保育を行うには、職員の連携・協力体制が不可欠である。そのために、『おたがいさま』の気持ちで、気軽に相談し協力し合える、そんな風通しの良い、楽しく学び合える園を目指している。

5　『安全最優先』で命を守る

台風13号の大雨では、2019年の房総豪雨の教訓から、前日に登園自粛を要請した。しかし、無理に登園する保護者も見られ、休園の判断も必要であると痛感した。安全優先で命を守るために見直しをしていきたいと考えている。

6　最後に

保育には、外からは見えない苦労や問題がたくさんある。職員が自分の役割を果たし、労を惜しまない努力によって園の運営や、未来を担う子どもたちのその子らしい育ちを支えていることを忘れてはいけないと思っている。